

O2-026

乳児期に気管切開術を受け思春期を迎えた子どもが通常学級で経験する困難とその対処

中島 真希¹、竹村 淳子²¹ 社会医療法人愛仁会 高槻病院² 大阪医科薬科大学

乳児期に気管切開術を受け、知的障害や肢体不自由がない小児気道疾患の子どもは、通常学級に通学することもある。しかし、日中も頻回な吸引や排痰を要する子どもが通常学級に通学する場合、何らかの問題や課題が生じているのではないかと考えた。

研究目的：乳児期に気管切開術を受け思春期を迎えた子どもが通常学級で経験する困難とその対処を、当事者の語りによって明らかにし、支援の方向性を見出す。

研究方法：半構造化面接を用いた質的記述的研究。分析方法は、Berelson の内容分析の手法を参考にし、面接内容をデータとしてカテゴリー化した。

研究対象者：乳児期に気管切開術を受けた高校性以上 30 歳程度までの通常学級に在籍・通学歴のある 10 人とした。面接にあたっては、小学校高学年から中学校卒業頃を想起してもらい、学校生活での困りごとと対処を語ってもらった。

研究結果：436 の記録単位から 27 サブカテゴリー、10 カテゴリーが抽出された。【 】はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリーを表す。通常学級で経験した困難は、【気管切開があっても授業中のノルマはみんなと同じ】、【自己吸引を獲得するまで付き添いが登校の条件】、【窒息のリスクといつも隣合わせ】、【吸引・排痰のために行動は制限される】、【運動と呼吸のバランスをとる難しさ】、【クラスメイトの自分への評価が気になる】、【気管切開のある自分を友人に理解してもらい難しさ】、【気管切開のある自分が学校に受け入れられる難しさ】、【困り事に気付いても相談は諦める】の 9 カテゴリーが抽出された。学校側が行っていた支援として、【学校生活になじませてくれる教員の配慮】があった。

考察：今回の研究結果では、対処のカテゴリーが極端に少ないのが特徴であった。授業においては、発声が困難な子どもが皆と同様に音読や歌唱等を課せられることに対し、〈出しにくい声を伝える工夫〉等の対処はしたものの、支援の求め方がわからないという困難があった。学校側が行っていた支援として、【学校生活になじませてくれる教員の配慮】がみられ、教員の行動を支援と受け取っている場合もあったが、子どもが望まない方法や相談なく行われたことに対しては、学校に受け入れられていないと感じることもあった。よって、当事者である子ども自身の思いを聞き、困り事の詳細を把握した上で支援策を検討する重要性が示唆された。

O2-027

助産師対象の胆道閉鎖症における便色カードの認識に対するアンケートテスト調査研究

安井 稔博¹、立松 あき²、土屋 智寛¹、
村山 未佳¹、近藤 靖浩³、直江 篤樹¹、
渡邊 俊介¹、井上 幹大¹¹ 藤田医科大学 小児外科² 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 看護部³ 埼玉県立小児医療センター 小児外科

【はじめに】

胆道閉鎖症（以下、BA）患者が自己肝長期生存を達成するためには早期の、特に 30 日以内の葛西手術が必要とされている。これを達成するために 2012 年より母子健康手帳に便色カードが導入され、早期発見を促すことが期待されたが、いまだに 3 ヶ月を過ぎて診察することもあり、カードが有効に利用されていないと考えられる。これはカードの活用方法や BA の重大性の理解が保護者だけでなく、新生児期に関わる全ての医療者も同じではないかと考えた。

【目的】

新生児期に見とその保護者に関わることのできる助産師を対象に現時点での便の色調や BA に対する意識調査を行い、便色カードの意義を再度確認することを目的とした。

【方法】

2021 年 11 月～2022 年 1 月にかけて愛知県助産師会にご協力いただき、オンラインでアンケート調査と講義を行わせていただいた。対象は愛知県内の全助産師 513 名で広報にはホームページや SNS を活用していただき、内容に深く言及せず任意の参加とし、アンケートデータは同意を得られたもののみを使用した。アンケートは 6 枚の BA 患児の便の写真を見てそれぞれ医師に相談するか否かを問い、同じ写真で便色カードを見ながら番号を答えていただくものや BA の病態に対する簡便な質問を行なった。

【結果】

2021 年 12 月中旬時点で 165 名の回答を得られた。参加者は助産師として 15 年以上が最も多かった。写真を見て医師に相談するかどうかを聞いた質問では、「相談しない」と回答するものが場合によっては半数程度あった。カードを用いて便の色を判断する際に、場合によって 3 番以下の便色と判断するものが半数以下のものもあった。しかしながら、4～7 番の便の色と回答したものの多くが 4 番と回答していた。BA は 1 ヶ月齢までには見つかると思っていたのは 75% 程度、手術で「完治する」と 50% 程度が思っていた。また、本疾患や便の重要性に対する個々のご意見も頂けた。

【まとめ】

助産師が便の色に対する意識や観察に対する知識が十分ではなかったことが示唆された。4 番は病院への受診を薦めることがより多くの BA 患児をスクリーニングできる可能性が示唆された。BA 患児の早期発見には医師だけでなく、より早期に見や保護者と接触する職種に周知することで実現する可能性が期待された。